

書評

書評コーナーに寄せて

2019年度の大学院教育と成果発信

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻教授／多文化共生研究所副所長
亀井伸孝

今号においても、本学大学院生参加の形態による書評コーナーを掲載する。本誌書評コーナー編集担当者として、これまでの経緯と今号の成果の背景について解説する。

本誌『共生の文化研究』に書評コーナーが初めて設置されたのは、前号に当たる13号(2019年3月刊行)であった(亀井編, 2019)。詳しい経緯は同号の書評コーナーの冒頭の解説記事において紹介したが、本研究所・本誌の活性化と、大学院教育の活性化の両方を目的として実施された。

具体的には、2018年度前期の大学院国際文化研究科博士前期課程1年次の必修科目「国際文化論」において、履修者を対象に、書評執筆のための基本的なスキルの指導を行い、同科目内で書評執筆課題を複数回こなした。さらに、提出物の中から優秀であると認められた作品を選定し、執筆した院生に本誌への掲載の機会を提供する旨の打診を行った。その希望を申し出た院生たちを対象に、さらに加筆修正の指導を行った上で、前号の刊行にこぎ着けた。最終的に、博士前期課程1年次(当時)の大学院生5名による5件の書評が掲載された。

2019年度は、2018年度に初めて試行したこの仕組みを継承するとともに、さらに発展性をもたせるべく、以下の三つのカテゴリーを設定して、大学院生による書評の執筆と投稿を募集した。これらのうち、(1)は前年度の形式を踏襲している一方、(2)および(3)は、今年度新たな取り組みとして追加されたものである。

【書評投稿の呼びかけ対象者】

(1) 大学院国際文化研究科博士前期課程1年次必修科目「国際文化論」の2019年度前期履修者全員を対象に、同様の機会を提供した。授業中に上記のシステムを紹介し、前号の刊行成果を教材として用いつつ、書評の執筆スキルを指導した。前期末に、提出された作品の中から優秀なものを選定し、執筆者に投稿を打診した。

(2) 前号で書評を執筆、掲載し、そのスキルをすでに習得している、大学院国際文化研究科博士前期課程2年次の大学院生。

(3) さらに、大学院国際文化研究科博士後期課程の大学院生も対象に加え、投稿の機会を提供する旨の呼びかけを行った。ただし、このカテゴリーでは、「国際文化論」で書評スキルを学んだ経験のない者が含まれるため、スキルに関する事前の一定の指導を受けることを条件とした。

大学院科目「国際文化論」履修者(上記カテゴリーの(1)における書評対象書籍選定の方針は、以下の通りとした。カテゴリー(2)および(3)の院生における選書方針も、この基準に準じることとした。

【書評対象書籍の選書基準】

(1) 本講義のテーマに関連する、以下のキーワードのいずれかに関わりの深い書籍を選ぶ(人種、民族、国民国家、異文化理解、多文化共生、社会調査、フィールドワーク)。

(2) なるべく、新しい作品(過去5年以内程度のもの)が望ましい。

(3) 他人に紹介したいと思える良書を選ぶようにする。また、既読の書籍よりは新たにに取り組む書籍の方が望ましい。

こうして対象書籍ならびに書評作品を募った結果、今回の取り組みでは、4名による4件の作品を受理することとなり、加筆修正の作業を経て、今号に掲載する運びとなった。前回に続き、今回も、書籍を単体で批評するのみならず、背景にある学問的潮流や、同時代の社会のあり方などを踏まえた、やや広めの視野をそなえた論評を目指すことを奨励した。その効果が、作品にも一定程度現れてきているものと見受けられる。

このような取り組みの継続を通じ、大学院教育を基盤とした、学問的な交流と発信、学際的な議論の振興を図ることができればと願っている。

亀井伸孝編. 2019. 「書評コーナー」『共生の文化研究』(愛知県立大学多文化共生研究所) 13: 123-133.

明治期に見る一億玉砕の引き金

国民統合と軍事力拡張のための天皇制

岩井忠熊・広岩近広・2019.

『象徴でなかった天皇：明治史にみる統治と戦争の原理』東京：藤原書店。

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程
根崎智央

現代社会において、アジア太平洋戦争、ことに日本がかの戦争に歩を進めた要因についての議論は尽きない。明治期の政治状況、天皇をめぐる動向から統治と戦争の原理を導き出すことが本書では試みられている。著者は立命館大学名誉教授で日本近代史を専攻する岩井忠熊と、毎日新聞社客員編集委員で、原爆や戦争を取材している広岩近広である。岩井は1943年の学徒出陣で海軍に入り、水上特攻隊から生還した。まさに戦争の生き証人と言える。本書は巻頭言とそれに続く5章で構成されている。巻頭言を岩井が、残る章を広岩が岩井の発言を引用しつつ著している。

巻頭言では、岩井の生い立ちから戦時中の経験が語られる。詔勅を暗誦させられた中学時代、天皇の不可侵性を背景に暴力による服従を強いられた海軍時代など、天皇制がその身に及ぼした経験を克明に記している。また、メディアによる大衆操作が悲劇を生んだ歴史を顧み、ジャーナリズムが権力から自立する必要性を説く。その観点から、明治期の言論機関の報道・論評を反省的に叙述する広岩の方針に賛同し、本書を編むに至ったという経緯を述べている。

第1章は、明治維新の過程、新政府の武力による政権の獲得、維持の様相が述べられている。王政復古の大号令の後、明治政府は「現人神」の概念をもって天皇に権威付けをし、国民を統治する意図があったことを明らかにしている。政府は武力をもって戊辰戦争を制した後も、武力による政権の維持と権力拡大を志向したとする。その際も、国民が従うよう、人心掌握を天皇に期待したとし、その意図のもと「人民告諭」を出したという過程を叙述している。廃藩置県、徴兵令などの施策を経て、国民皆兵制度による中央集権の軍隊が成立していく過程が描かれている。

第2章は、軍事力を背景に海外進出する日本が描かれている。台湾、朝鮮への出兵は、日本の国家的威信の確立を目指して行われたという背景を指摘する。ここに「国威宣揚の宸翰」の理念が用いられ、日本軍による対外的軍事行為が行われたとしている。また西南戦争後、山県有朋により軍政改革が行われた経緯を説明する。天皇に直属し、政府から独

立した軍隊へと転化する過程が述べられている。

第3章は、政府による自由民権運動の弾圧、天皇の勅諭による軍人統制の様相が述べられている。政府の軍事力による抑圧と専制に反発して自由民権運動が起こったと岩井は言う。そしてそれを讒謗律、集会条例、新聞紙条例により弾圧する過程が描かれる。「北海道開拓使官有物払下げ事件」を契機に政府への批判の声が高まると、山県は明治天皇の名のもと「軍人勅諭」を出す。それにより、指揮官の命令は天皇の命令と同じであることを強調し、日本の軍隊は天皇の軍隊であるという内部統制を目指したと岩井は評している。広岩は、「軍人勅諭」が軍人に与えた影響の大きさを指摘し、それが国民にも太平洋戦争末期の「一億玉砕」という形で影を落とすことになると因果関係を見出す。

第4章では、日清戦争前後における日本国内の動向、対外戦略が述べられている。「超然主義」の概念のもと、内閣は天皇に任命された存在であるという正当性を得たことが示されている。次いで『毎日の3世紀（上巻）』（毎日新聞社、2002年）からの引用をもとに、日清戦争時のメディアの報道の過熱、国民の興奮と歓喜の様子が描かれている。それを受け広岩は日清戦争を、メディアと国民も間接的に参戦した戦争、国を挙げての戦争と評価している。戦争後、清との講和条約に対し、三国干渉が行われると、日本はロシアを仮想敵国とし、「臥薪嘗胆」の国是をもって、国民世論を統一し更なる軍国体制の強化を進めていったという過程を叙述している。

第5章では、日露戦争と韓国併合をめぐる動向が述べられている。天皇による「露国に対し宣戦」の詔勅をもって開始された日露戦争に対し、非戦と反侵略を掲げた内村鑑三や幸徳秋水の名を挙げ、そのような先覚者がいたことを忘れてはいけないと岩井は強調する。日露戦争後については、武力による韓国併合が断行され、天皇への朝鮮統治権の譲渡、現地民への皇民化教育の展開がなされていったことを述べている。日本国内において国民の教化、統一がはかられ、天皇の名のもと「戊申詔書」が發布された。この行為を広岩は、国民道徳の強化であると評する。大逆事件や多くの不敬事件が起こると、政府は天皇制国家体制再強化をはかった。むすびにて、武力に

よる海外進出は、大正、昭和にも引き継がれ、日本人310万人が犠牲となるアジア太平洋戦争に突き進んだ歴史を叙述している。

本書における論点は次の2点である。一つは主体的に行動する国民の姿、いま一つは、戦争の起こる原理である。

1点目に関して、本書では、明治期の軍部、天皇など国家を率いる立場の人物に焦点が当てられている。しかし、当時においても、国民は必ずしも抑圧され振り回されるだけの存在ではなかったことが理解できる。日清戦争に関しては、「戦争は前線の兵士だけでなく、メディアと国民もまた熱狂して間接的ながら参戦していった。」(p.170)と広岩は評している。戦争の際、戦闘力を持たぬ国民は敵国の攻撃の最大の被害者となってしまふ。アジア太平洋戦争下での空襲や原爆投下、地上戦などにより多くの民間人が犠牲になった。同時に国内においても、労働力や戦力として搾取される憂き目にあう。しかし、国民は戦争の加担者、侵略の加害者にもなりうることをこの一文は読者の意識に刻み込む。それと同時に、巻頭言で岩井が述べているように、広岩のジャーナリストとしての自己反省ともとれる叙述であることがうかがえよう。メディアがもたらす情報、発する論評が世論を動かし、人々を危険な道へ誘う可能性があることを我々に示唆している。

日露戦争の後、不満を募らせた国民による暴動である日比谷焼き打ち事件について、広岩は、「戦争を主導する軍部にとって、こうした国民の「熱狂」はある意味で勇気づけられたかもしれない。」(p.238)と評している。この一文は、強烈な違和感を読者に与える。首都で起きた国民の暴動がなぜ、軍部を勇気づけることになるのかと疑問に思うことであろう。この事件のような国民の「熱狂」と表現されるエネルギーは国家に打撃を与えるものであったことは想像に難くないが、反対に、そのエネルギーが侵略戦争の肯定、海外への敵対心となって表れたとき、戦争を支える原動力となろう。膨大に膨れ上がった国民のエネルギーが軍部の暴走を支えうる、それは形を変え現代でも起こりうるという危機感を読者に抱かせる。

2点目に関しては、本書の副題に「戦争の原理」という言葉がある。大半の人間は、戦争はなぜ起こるのかという疑問を抱いたことがあるであろう。その疑問に対し、中江兆民の『三酔人経論問答』の中に広岩が一つの解答を見出していることがわかる。軍備は相手を恐れ「ノイローゼ」になることで拡張される。そして、双方が「ノイローゼ」になり「先んずれば人を制す」と思うようになると開戦するという指摘は、戦争の原理に対する一つの理解を読者に与える。現代社会の情勢を鑑みるに、この指摘は我々を唸らせるであろう。日本に関して言えば、領

土問題をめぐっての近隣諸国との緊張関係、核開発・保持の問題などが思い起こされよう。そのような情勢も要因の一つとなって、近年の日本では、憲法9条の改正や解釈の変更をめぐっての目まぐるしい議論が交わされ、現在進行形で続いている。それにより、自衛隊が外征型の武力組織となる可能性も考えられる。朝鮮出兵の叙述では、「外征型の常備軍を保有していると、何はともあれ動かしたくなるのだろうか…。」(p.152)と広岩の内心の吐露ともいべき一文が確認できる。これは、広岩の主観ではなく、侵略戦争が起こる要因の指摘とも捉えられる。そして、かかる自衛隊をめぐるのが問題が行き着く先を暗示しているようにも捉えられよう。広岩の指摘は、近代日本特有の事象ではなく、現代にも投影できるものであることを読者に思考させる。

本書の題である「象徴でなかった天皇」とは何を指すのか。日本国憲法にて定められている「象徴」天皇ではなかった時代、換言すれば、大日本帝国憲法下の「元首」、「統治権」の「総攬」者である天皇を指していると考えられる。しかし、そのような教科書的な意味合いでのみ用いられているとは考えにくい。明治期の対外戦争、軍事力の拡張、国民統合は天皇を戴いて実行された。背景に当時の政府の思惑があったにせよ、天皇の名のもと多くの人々が犠牲となった。むすびにて岩井は、「歴史は、はじめの一步を踏み誤ると、深刻で悲惨な結果をきたすことがあります。」(p.276)と指摘する。その身で戦争を経験し、日本近代史を研究してきた岩井にとって、明治期はこの言葉に収斂される時代であったのであろう。戦後70年が経ち、現代の我々は一応の平和を謳歌しているといえる。しかし、我々が生きる今も歴史の一部であり、深刻で悲惨な結果をきたすはじめの一步となりうる可能性があることをこの一文は投げかけている。明治期を凍結された歴史として俯瞰的に見ずに、当時から現代に何を投影させるかが重要となってくるであろう。この先、国民が「熱狂」的に統合し、過剰なナショナリズム、排外主義の世論が強まったとき、その象徴として天皇が戴かれることもありうる。そのような状況下で外征型の軍が再び組織されたとき、我々はまた70年前の惨劇を繰り返すこととなるであろう。天皇制を我々の実生活とは遠い異次元の存在として思考の外に置くのではなく、我々はその歴史から学び、現状の問題について考え、議論し、行動することが平和の構築、維持に資するものとなろう。歴史叙述を通し、それらを考えるヒントを本書は我々に与えている。

毎日新聞社. 2002.『毎日の3世紀：新聞が見つめた激流130年(上)』東京：毎日新聞社.

近代から現代へ 「未熟」な国民へのまなざし

加藤聖文・2017.

『国民国家と戦争：挫折の日本近代史』東京：KADOKAWA.

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程
下廣日向

右傾化の時代である。ティムール・ヴェルメシュ著の小説『帰ってきたヒトラー』（森内薫訳、河出書房新社、2014）は、2012年にドイツで出版されてベストセラーとなり、2015年の映画化作品は翌年日本でも公開されたヒット作である。現代にタイムスリップしたヒトラーがコメディアンとして再び大衆の心を掴んでいくというものだが、難民受け入れに抗議するドイツ民衆の「我々が国民だ」という叫びを聴きながら、ヒトラーが「好機到来だ」と呟く映画のラストシーンに象徴的なように、頻発するテロ行為や難民・移民政策の問題に煽られた排外的なナショナリズムが、世界的に力を振るい始めている中でこそ、この作品は大きな意義を持った。日本も例外ではなく、進展しない慰安婦問題から、「日本最古の歌集」からの新元号採択まで、ナショナリズムは様々な形で広まりつつある。

「国民と民族は同じか？」という鮮烈な問いかけで本書は始まる。「実はこれは似て非なるもの」、「固定化しているわけではなく、恣意によって「創られる」ものだとする本書の導入は、上述のような、日本の無自覚的意識にひそむ「幻想」に基づくナショナリズムと対立する姿勢を露わにしていよう。本書は、現在の日本国家・国民がどのような歴史の上に「創られた」ものであるのかを解明するため、幕末から敗戦までの近代日本のゆき方を、「国民国家」という概念のもとに捉え直す、「ありそうでなかった」（p.19）試みである。人間文化研究機構国文学研究資料館准教授、日本近現代史・東アジア国際関係史・アーカイブズ学を専門とする加藤聖文が筆を執る。

本書は全四章に序章と終章を加えた全六章から成る。序章ではまず、現在のあらゆる国家を、恣意的に線引きされた「国民」に拠って立つ「国民国家」であるとし、その特徴として、国民を統合する共同体意識、国家と国民が互いに制御しあう緊張関係を挙げる。そして、国民統合の根拠に「建国理念」と「民族意識」を挙げ、前者を評価しながら、実際には後者の「ナショナリズムに依存する国家が多い」として、本書の立脚点を明確にする。

第一章は、明治維新前後の「国民」の萌芽から始められる。幕末、水戸藩が幕政立て直しのために、

人民統合の象徴として天皇を位置づけた尊王論が、攘夷論と結びついて尊攘思想となり、倒幕イデオロギーへと変化していく過程をまず明らかにし、その中で生まれた土佐勤王党の、中間権力を排して個人が天皇に直属しようとする理論に注目する。西郷隆盛の公議会論や長州藩の「藩民皆兵」も、身分制打破につながる革命的要素を持つものとして言及されるが、ここに見られるのは日本における「国民」意識の天皇との不可分性である。天皇の名の下に国家と国民が直結する制度を創り出した明治新政府の改革への、幕末の思想からの連続が示されている。

第二章は、意識の面での「国民」創りについてである。制度改革後、新政府も国民も意識の改革は遅れ、理想主義的国家像が行き詰まったとき、国家理念と国民的合意を形成するべきところで、実際には国家を運営する官僚の育成と行政整備が優先されたことが論点として挙げられる。そのため、地主や上層農民は、政治参加と憲法制定を求めて自由民権運動を起こし、彼らと政府との「妥協点」として大日本帝国憲法が制定された、と筆者は見ている。さらに、従来のモザイク状の村を解体する地方行政改革、教育と徴兵、そして日清・日露の対外戦争によって、政治から遠かった中下層農民や町人までもが「国民」意識を持ち始め、遂には生活と直接無関係な政策にまで意見し始めるまでになった変化を、序章で述べた「国家と国民の緊張関係」の始まりであるとして、次章へ繋げている。

第三章は、統制が難しくなる国民を取込む新しい権力としての政党に焦点を当てる。政界の権力構造・社会構造が複雑化する中で「国民感情」の影響力増大と、政党のイメージ戦略に担ぎ出され、抽象化・神聖化される天皇とを結び付けており、ここでも「国民」と天皇との密接性が強調される。また、植民地獲得や大戦景気による国内格差の拡大が国民像を変容させ、米騒動のような権利主張も激しくなる中で、それに対応し得た政党が外交や軍事において広くリーダーシップをとるようになるが、権力獲得志向が強く国民統合には至らなかったなど、国家と国民との関係にさし始める不穏な影が描き出されてゆく。

続く第四章に、その影の蔓延する様が克明に描か

れる。政党が「政治ゲーム」に傾く中、複雑化した政治に対し権利を持て余した国民の国家依存としての国家主義の隆盛が示され、その一方で、満蒙問題の「生命線」意識など、合理的な外交をも感情論で非難し倒閣に至らしめるほど暴走した国民感情の姿が映し出される。このような「未熟」な国民の中で、天皇を中心にすべてが包摂される「国体」という曖昧な国家観が生まれ、それを取込んだ軍部は、強力な指導者を欠いたまま、天皇大権を聖域化することで総力戦体制を可能にしたとされ、「糸の切れた凧のように」日中戦争に突入した国家の「迷走」ぶりが露わになる。

そして終章は、ここまでを振り返りつつ敗戦までをまとめる。国民国家にあるべき緊張関係を持たず、絶対上位の天皇によって憲法を骨抜きにし、植民地支配などにおいて多くの矛盾にぶつかりながら、最後まで現実直視を妨げる抽象概念であった「国体」。そこに収斂した歴史の歩みは次のようにまとめられる。「国民の政治参画のトレーニング」が間に合わず、未成熟のまま「挫折」した日本の「国民国家」。それは戦後の新憲法によって創り直しが始まりはしたが、果たして現在の国民は「国家を制御できているのだろうか」と反語的に問われ、結ばれる。

日本近代史を、国民と国家との「未熟」なもつれあいとして描いた本書は、どのような意図のもとで刊行されているのだろうか。

上では割愛した「むすびにかえて」にて、著者・加藤は執筆当時（2017年）の日本社会における維新回帰志向や、その裏返しのような現行政治への無関心に厳しい口調で言及し、「再び国民が国家に取り込まれる可能性」に対する強い危惧を示している。

歴史とは国民としての「誇り」を抱かせるためにあるのではない。（中略）失敗したことを直視し、同じ失敗をしないためにどうすべきかを学び、そしてどのような国家を自分達が創っていくべきかを考えるためにある。（p.211）

「自分達」が歴史を考え、国家を創っていかねばならないというのが、本書の基調をなすメッセージであろう。この反映は随所に見られるが、まず形式的なところでは、幅広い読者を想定していることが挙げられる。「官僚」「政党」「ワシントン体制」など、日本近代史の専門書では自明の前提知識として使われている用語を、文脈に沿って丁寧に定義し直す筆致から、より広範な層へ届けようという、本書の趣旨を補強する姿勢が読み取れる。

そして内容、つまり歴史認識においては、「国民」の批判的な捉え方に重点をおくことができる。「強

権的な国家／抑圧され動員される国民」という、戦時期の見方として広く一般化している支配／被支配のイメージを、相対化する捉え方である。国家とともに「国民」もまた未熟であったという見解には、重要な点が二つ指摘される。

一点目は、国家主義の台頭に見られる、「国家運営を国家に任せるべき」という「お任せ」思想である。「国体」観念の、曖昧ゆえに強力で絶対的な性質はたびたび論じられるところだが、それをイタリアのファシズムやドイツのナチズムと比較しながら、それらのような体系性・論理性はないとはいえ、「国民国家としての成熟度が低い国家において」、「国民の側から出てきた」（p.175）ものという文脈で語っていることは特徴的であろう。

二点目は「国民感情」の危険性である。本書に描かれるのは、国策に巻き込まれた「被害者」としての国民ではない。例えば満州事変や満蒙領有論に喝采を送り、感情論で外交を非難して悪化させた国民であり、戦争に巻き込まれただけだとは断じて言えない、「加害者」としての国民である。

このように、本書には「国民」への批判的視点ははっきりと打ち出されている。むろん、国民の「未熟」さの一因が、国家主導の体制づくりの性急さにあったことは本書でも述べられているし、国民が決して受動的でなかったという指摘は本書が初めてではない。しかしながら、本書の批判姿勢が評価できるのは、現代日本における「戦争の反省」という固定化しつつある観念を更新する可能性が、より大きく感じられるためである。戦争の記憶を「同じ失敗をしないため」に継承するのならば、その悲惨さという被害の記憶ばかりでなく、国民が悲惨さを助長させた加害の記憶こそ、自覚的に受け継がれるべきはずである。積極的なそれはもちろん、「お任せ」という無関心も、この場合、加害に含めるべきものだ。「自分達」＝国民自身が国家を創っていく上で目をそらしてはならない部分が、ここに抉り出されている。

本書は、冒頭で述べたようにきわめて現代的な意味を持つ問いから始まり、現代の日本国家のあり方への自覚を読者に促す言葉で結ばれるが、そこには、描かれる歴史のむこうに現代の日本国民・国家を透視する一貫したまなざしがある。平易かつ明快に書かれた過去の「国民」への批判は、そのまま現代の読者へ送り届けられ、日本国民としての歴史的自覚の見直しを迫るのである。このようにして、敗戦により断絶されたかに思われがちな日本近代史を、観察対象としてだけでなく、現代を見返すための鏡として描いてみせ、広い読者にそれをひらくことで、一般化している意識に楔を打ち込もうとした点は、本書の功績であると思われる。歴史を狭い学術性・専門性の中に閉じ込めないためにも、有意義な書であるといえよう。

近年、日本では選挙の際の投票率の低さが問題になり、対策が講じられたにもかかわらず、2019年7月の参議院議員選挙の投票率は有権者の半数を切った。増税や年金の実質的破綻、そして解決を見ないまま風化しつつある震災など、政策に関わる問題は山積しているが、本当に問題なのはそれらに対する国民の態度であろうと、本書は叱責しているように思われる。国家を制御する「国民」としての自覚を持とうとするとき、盲目的なナショナリズムの陥穽から自らを守るのに十分な記憶を、日本は持っているはずである、と。冒頭で評者が例に挙げたドイツは、本書でも日本と同じ「後発組」の国民国家として幾度か取り上げられているが、現在ではナチ

ス・ドイツ時代の負の遺産をきわめて自覚的に引き継ぎ、埋没させない姿勢を徹底している。対する日本は、戦時下のあり方をはじめとする自国の負の面を、拒絶するのではなく理性的に見返すことができているか。疑問が持たれざるをえない状況下で、本書が出版されたことの大きな意義が認められるであろう。歴史の読み解きにおける本書の態度は、近代から地続きの現代を生きている我々が、「国家」というものを自己のより根本的な問題として引き受けるための、確かな足場を与えてくれる。

ヴェルメシュ, ティムール. 2014. 森内薫訳. 『帰ってきたヒトラー(上)(下)』東京: 河出書房新社.

社会的連帯に関する新たな議論を喚起する書

奥田若菜. 2017.

『貧困と連帯の人類学: ブラジルの路上市場における一方的贈与』横浜: 春風社.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程
木戸志緒子

本書は、神田外語大学准教授であり、文化人類学を専門とする著者による、ブラジルの貧困地区における社会的連帯を主題とした著作である。ブラジル連邦共和国のブラジリアへの留学と路上市場での2年間のフィールドワークを経て、貧困、格差、連帯について考察する。ブラジル都市部貧困地区の路上商人の家で居候し、市場で商品売りつつ得た詳細なデータにより、外部からの貧困イメージと、路上商人ら自身の貧困の捉え方の差異を示す。

本書は、5章で構成されている。第1章では、1960年代に計画都市として建設されたブラジリア連邦区の歴史を、貧しい北東部出身の建設労働者たちの視点から明らかにする。首都建設後、元労働者や移住者は衛星都市に居住したが、その周辺に非合法の町が拡大してファヴェーラ(スラム)化した。1969年には不法占拠者根絶計画により彼らは政府が新設した衛星都市セイランジャに強制移転させられた。政府が「首都に相応しい市民」のみを包摂し、「不法占拠者」を排除・根絶しようとしたために、富裕者と貧困者の階層間の地理的な分断が顕著となり、格差というブラジルの社会問題を映す鏡となったと著者は述べる。

第2章では、農村貧困地域から都市への移住者の経済的变化を検証した上で、路上市場の民族誌を描いている。彼らは、都市下層部のインフォーマルセクターに組み込まれ、不安定な非合法の労働に従

事する。路上市場における非正規商品の流通や行政による食堂の運営の状況について、露店主や売り子、行商人たちの語りを交えながら詳述する。インフォーマルセクターは、否定的なイメージを伴うものの、正規雇用に入り込めない人びとの生存戦略として容認されているブラジルの風景であるという。

また、路上市場から脱出して正規雇用で働く第2、第3世代の教育的経済的水準の上昇を示すと同時に、路上商人の故郷ブラジル北東部の町や集落を紹介する。都市では恐怖のあるフーア(路上)が拡大し、安心できるカーザ(家)が大幅に縮小する中で、北東部が「温かくもてなす人びと」「質素で謙虚」な人びとの場であるカーザとして認識されていると分析する。

第3章では、マーケット・エコノミーに基づく規範(正しさの規範)と、モラル・エコノミーの相互扶助の規範(善さの規範)について考察する。前者は、正しい労働に基づいて「汗をかいたカネ」を稼ぐことで、貧困からの脱却を試みる個人主義的社会上昇であり、リベラリズムの態度であるとする。一方後者の「伸びるカネ」は、相互扶助のためのコミュニティアン的態度で、北東部の共同体の規範である。

さらに路上商人たちは、「トラバリャドール(働きの者)である正しい我われ」像を持つことで、取締りや公的扶助の対象となる不安定な立場を払拭しようとする。そして、それを脅かす取締りとの葛藤や

詐欺師などの「正しくない人びと」との対比から「正しさ」と「非合法」の矛盾を乗り越えようとする。また、働くコラージュン（勇気・やる気）も賞賛され、怠け者や他人を利用する人は批判される。

第4章では、一方的贈与として「正しさ」と「善さ」がぶつかり合う邪視持ち、ねだり、物乞いについて、「場をわきまえていない」と批判される事例について考察する。人のモノに視線を投げかけ羨む邪視持ちの「分ける」という要求は、「善さの規範」に基づくが、所有者はモノに損害を与えないよう「正しさの規範」を用いて「働け」と要求を拒絶する。ねだりについては、労働してカネを儲ける場所で贈与交換を求めること、贈与交換として要求したカネを市場交換のカネとして用いようとするのが「間違っている」と批判される。

また、物乞いへの態度は、邪視とねだりに対する毅然とした批判とは異なり、受け入れられる。物乞いに贈与する場合はカーザ的「善さの規範」、贈与しない場合はフーア的「正しさの規範」を挙げて「言い訳／弁明」することが必要になる。その迷いについて著者は事例から明らかにする。

第5章では、「乞うこと」が受け入れられている社会に関する先行研究を概観し、社会関係の継続のためのねだりと、生業としての物乞いの事例を紹介する。贈与の三原則とされる贈与の義務、受領の義務、返礼の義務が適切に行われないと、贈与者と受贈者の関係を損なう危険がある。それを避けるために、どのような作法で一方的贈与を行うか検討し、良い贈与と悪い贈与について考察することで、他者とのつながりと連帯の可能性を模索する。

結論として、非正規商品の経済活動で人とのつながりを重視する姿勢は、一般的に知られている世界的な経済市場システムとは別の要素を含む経済活動であることを導き出した。そして、富裕者が貧困者に贈与することになぜ困難が伴うのか、富裕者の知性レイシズム、絶対的貧困基準を用いた貧困の否定、困窮者の社会問題化という三つの理論を挙げ、社会への責任領域をめぐる議論へとつなげる。貧困は社会的連帯の不具合であるとし、富裕者と貧困者の間でタテのつながりを模索することの重要性を指摘する。

以上のように著者は、「誰が何をどれだけ手にするのが正当な社会なのか」という問いを追求すると同時に、不平等に関する先行研究を交えながら今日

の社会的な連帯をめぐる議論の活性化について述べている。また、貧困者の日常や自己の捉え方、貧困世界で生きるための規範を民族誌により明らかにした。

利益を追求するマーケット・エコノミーと、ブラジルの貧困者の社会連帯によるモラル・エコノミーを対比することにより、貧困を単に社会問題化するのではなく、貧困者と富裕者の非対称性を解消するタテのつながりの可能性を模索している。「貧困世界に住む人びと」を主題にするために当事者不在となった「貧困」を、再び社会の不平等を是正するための議論の中心に戻すことを試みている。

先行研究の概観に際して、貧困者の問題に関する東南アジア、アフリカにおけるインフォーマルな社会関係に投資する農民の自立性の議論やそれに対する批判「アフリカ小農論争」などを、経済面から丁寧記述する。同時に、政治面からリベラル・コミュニタリアン論争、利他的贈与と功利的交換は表裏一体で使い分けられているという論を引用することにより、共通する自身の理論の位置づけが明確にされている。また、エチオピアの農村社会の富の「独占」と「分配」、トロブリアンドの物々交換、トゥルカナ社会における関係継続のための授受など、他国、他地域の例と比較されており、論点が理解しやすい。

さらに路上商人たちへの聞き取りと著者自身の体験を生かし、富裕者と貧困者の問題の捉え方の差異を明確にしている。困窮者を「不平等な社会を体現するモノ」と考える富裕者に対して、「まるで自分のことのように他者の苦しみを感じ」同一化する貧困者たちが、相互扶助の規範によって生きていることが実証されている。雇用主とは上下関係ではなく、労働と賃金という財を介した対等な関係であり、貧困者たちはコラージュン（勇気・やる気）を持つトラバリャドール（働き者）であるという誇りを持っている。故に富裕者からの「いわれの無い」贈与が負担を感じさせ、侮辱となることが明らかにされている。

本書は、社会的連帯による経済は市場経済と拮抗するものではなく、相互補完的であるということを示唆する。貧困を「彼ら」の社会問題でなく「我われ」の身近な問題とするためには、異なる他者同士が関心を持つことによりタテのつながりを持つことが重要だと指摘する。このような社会的連帯に関する新たな議論を喚起する書であるといえる。

「旅」による変容から自－他の関係性を考える

Beaman, Lori G., and Sonia Sikka eds. 2016.

Constructions of Self and Other in Yoga, Travel, and Tourism: A Journey to Elsewhere.

N.p.: Palgrave Macmillan.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
福田薫

本書は「何処か他の場所 (elsewhere) への旅」が惹起する変容をテーマに、11人の研究者の手による12編の論文をまとめたものである。執筆者は皆、2015年にオタワ大学で開かれた「A Journey to Elsewhere: Spiritual Travel and the Quest for Authenticity」と題する学際的ワークショップの参加者であり、そこでの発表、討議を発展させる形で本書が刊行された。第1章と第12章を担当する編者のLori G. Beamanは、オタワ大学古典・宗教学研究科教授として宗教と多様性について研究している。もう一人の編者、Sonia Sikkaも同じくオタワ大学で教鞭をとる哲学の教授であり、第2章は彼女の手による。第3章から第11章を構成する論文を寄稿した他の9名の執筆者には、カナダ、米国、インドの大学に所属する研究者や博士課程大学院生が含まれ、その専門分野は宗教学や哲学以外に、社会学、文化人類学、ジェンダー学、歴史学など多岐にわたる。

第1章は序として、本書の背景、目的や問題設定などと共に各章の概略を提示している。本書構想の発端は、2006年に出版され、後に映画化もされたElizabeth Gilbertのベストセラー作品、*Eat, Pray, Love* (邦題『食べて、祈って、恋をして』)で描かれる、ヒロインの「何処か他の場所」としてのインドやインドネシアのバリ島へのスピリチュアルな旅に対する学問的好奇心であったというが、そのような旅は地理的、文化的、歴史的な移動であり、人に根源的な変容をもたらす可能性を孕む。と同時に、オリエンタリズム、ポストコロニアリズム、モダニティ、ジェンダー、真正性 (authenticity)、スピリチュアリティ、権力などの問題とも深く関連するものであり、これらの問題意識が以降の各章での論点を形成している。

第2章では、他者や他者に関する言説の理解・受容の力学について論じている。かつて植民地時代の西洋人は、ニーチェの「力への意志」によって説明されるような、自らの文化に優位性を持たせたいという欲望に基づき、非西洋を劣ったものとして周縁化した。Gilbertの*Eat, Pray, Love*の書籍版と映画版との間の差異についての批判的検討を通じ、否定的な他者受容や周縁化は現代でも見られることが露わにされる。

第3章は、カナダの先住民であるファースト・ネーション (First Nations) が、その歴史・観光スポットにおいて祖先の歴史を語る観光用の演劇パフォーマンスに注目する。「演じる」という「欺瞞」を通じ、先住民の演者が植民者と被植民者、観光客と観光される者という既存の関係を揺さぶり、新たな関係性を再構築することを、ホミ・バーバの「第三空間」概念を援用して説明している。

第4章では、動植物を人間の縁戚として捉え、時に動植物のために生命を賭すこともあるインドのビシュノイ (Bishnoi) と呼ばれるビシュヌ派共同体でのフィールドワークから、自分とは異なる存在論的体系を持つ集団との遭遇が、自己と他者を新たな方法で想像するための変容の機会を生み出すことが示される。

第5章では、ツーリズムにまつわるイマジナリーを宗教学の観点から分析し、*Eat, Pray, Love*は西洋社会に伝統的に備わる「旅と再生」の宗教的概念に共鳴することが提示される。

第6章は、女性と場所・空間、旅の中での超越と自己発見にまつわる考察である。中世インドにおいても尼僧など旅する女性は存在しており、漂泊や旅は超越的経験を得る方法であった。旅は女性にとって日常の馴染みある場所＝「此処」から離れることであり、「何処か他の場所」で心身を通じた超越的経験を得ることで自由な自己を発見する、と述べられる。

第7章では、1913年発行のガイドブック、女性向けベルリン案内がそれまでの中産階級女性と都市との関係、それに付随する言説を根源的なレベルで変容させ、女性同士の連帯を促し、ベルリンに女性の集合的アイデンティティの場というイメージを与えた様子が描かれる。

ジェンダーを意識した小論は、第8章としても収められている。ここでは、女性的とされる「ヨガ・ツーリズム」と、男性的とされる「ゴスペル・ツーリズム」(米国の教会が運営する海外での短期布教ボランティア活動プログラム)の参加者の語りを分析し、ジェンダーによる推測・ステレオタイプがいかに宗教的ツーリズムの動機や成果の評価を偏らせているかが示唆される。

第9章は、真正性、自己、他者の関係を扱ってい

る。自己の解釈学という枠組みの中で、他者や他所に向かおうとするスピリチュアルな探求は個人の旅を促進するが、それは時間的および地理的な円環運動を成すという。

第10章から第12章までは、ヨガに着目した論考が続く。第10章では、真正性の問題とも関連して、古代インドに端を発するヨガの歴史や思想面の理解があればこそ、新たな創造的再解釈が生まれる、との立場から、西洋での昨今の時流に乗ったヨガ理解を批判している。

第11章は、西洋でのヨガについて考察を加える。モンテリオールの2つのヨガスタジオでのミニ民族誌に基づき、ヨガスタジオは「聖とも俗とも判然としない、その中間に存在する空間」であり、この複雑さや矛盾が現代の資本主義社会における主観性の特徴を示している、との結論が導かれる。

第12章では、カナダと米国の公教育および法律の場に見られるヨガを取り上げている。学校のヨガプログラムをめぐる裁判記録から明らかとなるのは、ヨガから宗教的ニュアンスが取り除かれ、米国カリフォルニア州裁判所の言を借りるならば、ヨガは今や「インド文化におけるのと同様かそれ以上にアメリカ文化に根付いている」完全にアメリカ的なものとして再構築され、主流派の宗教であるキリスト教にも受け入れられやすいものとなっている、ということである。これを受けて「宗教」「スピリチュアル」「世俗」という語の意味や、これらの語が社会的に構築される際の権力との関係について、改めて問い直す必要がある、との指摘がなされる。

前述のように、本書の考察の入り口は *Eat, Pray, Love* の中でヒロインがスピリチュアルな完全性や超越性を求めてインドへ旅する箇所に表示されている現象——「宗教的ツーリズム」だけには収まらないと思われる現象——に対する関心であり、ヒロインは「女性一般 (everywoman)」の表象であるとの仮説を前提として、「何処か他の場所への旅」がもたらす変容が論じられている。こうした旅と変容への多面的な考察が本書の特徴の一つだが、注意すべきは、本書が扱う旅やツーリズムは通常のツーリズム研究が対象とするものと必ずしも重なるわけではない点である。本書では旅に対し、より柔軟で広範な意味づけがなされており、そこには物理的・地理的な移動を伴わない旅、他者性との遭遇といったきわめて概念的な「旅」も含まれる。第11章で、物理的な長距離移動は、他の場所と関わりを持つことにおいて第一義的な必要条件ではなく、今日のグローバルな世界では我々はむしろ実際に移動することなく「何処か他の場所への旅」に出かけている、と述べられている通りである。

また、執筆陣の専門分野が多様なことにも起因しているのだろう、本書の論考の視点、切り口の多彩さ、学際性にも目を引かれる。それは読者を新たな視座や問題意識に導くのに十分な多様性を備えたもの、とすることができる。本書の原型となったワークショップの参加者と本書執筆陣は同じ顔ぶれであるとのことだが、通常の学会とはかなり趣の異なる、オープンで親密なスタイルで開催されたようである。主催者の Beaman によると、様々な専門分野の研究者を集めたワークショップだったため、互いの知見を学び合い、補い合えるように、発表はカジュアルな形式でおこない、テーマを絞らない自由なディスカッションと会話に時間を割く実験的なプログラム構成だったという。このような型にはまらないポリシーは本書に収められた各論文にも反映されており、意図的に短く簡潔な形で執筆してあるため非常に読みやすいものとなっている。

女性というファクターも本書の特徴に挙げてよいだろう。ヨガやスピリチュアルな旅には女性の参加が多いという特徴がある。そして本書の執筆者は全員女性であり、その中にはヨガ実践者も複数含まれている。つまり、研究対象との社会的、文化的、感情的な近接性が存在しているのではないかと推測され、発端となった Gilbert の作品への学問的関心も執筆者らが女性であることとまったく無縁とはいえない部分があると思われる。それは客観性を損なう危険もあるとはいえ、体感的・直感的な理解をもたらす、対象を立体的に把握する一助ともなり得るのではなからうか。

上記に挙げた点は互いに絡み合って本書の特徴を成しているが、一方でそれらはまた本書の弱点とも捉えられる。例えば論考の簡潔さは、舌足らずで議論が不十分との批判も招く余地がある。実際、もっと詳細な説明や踏み込んだ分析を期待したい、との印象が読後に残されたことは否めない。その意味で本書はまだ発展途中の取り組みであり、今後さらなる検討の充実と論の展開が図られて、グローバル化が進む中での「何処か他の場所への旅」による変容とそこに見られる権力の力学の吟味、それらに付随する不均衡な関係性の超克に向けて新たな気づきをもたらすことが望まれる。

岡本亮輔. 2015. 『聖地巡礼：世界遺産からアニメの舞台まで』東京：中央公論新社。

山下晋司編. 2007. 『観光文化学』東京：新曜社。

Gilbert, Elizabeth. 2006. *Eat, Pray, Love: One Woman's Search for Everything Across Italy, India and Indonesia*. New York: Penguin.